

翻刻『西郭 俗湖月抄 草案』

田中，道雄

<https://doi.org/10.15017/12308>

出版情報：語文研究. 14, pp.34-50, 1962-05-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

翻刻『西郭俗湖月抄草案』

田 中 道 雄

解 說

一
佐賀県鹿島市中川文庫蔵。大本。一冊。写本。表紙共美濃紙至二十一丁、墨付同。各頁八行或いは九行。題籤・内題・序・跋・奥書なく、表紙中央に「西俗湖月抄草案」と外題。第一丁目表、本文右上部に「中川文庫」の印記を有する。同文庫は、鹿島鍋島家歴代の集書に成り、現在同市祐徳神社に寄託中のもの。筆写はすべて同筆。元禄宝永期を下る書体とは思えない。

内容は京島原の遊女三十人の評判記で、その巻頭に茶屋主人、巻尾に駕かきの妻各一人を配し、合わせて三十二条より成る。即ち、茶屋主人は出口衣紋馬場茶屋藤屋彦右衛門、駕かきの妻ははつで、遊女は抱主別で中ノ町一文字屋註の十四人を筆頭に、下ノ町桔梗屋喜兵衛内六人、中堂寺大坂屋依左衛門内四人、下ノ町大坂屋太郎兵衛内三人、上ノ町桔梗屋八右衛門内二人、下ノ町柏屋又十郎内一人の順、位別で太夫四人、天神十八人、囲八人という内訳である。遊女各条の記載形式は、まず遊女名・町名・屋号・位を挙げ、次いで本文、最後に源氏名に因む発句一句を付ける。頭初の名寄細見形式は『朱

雀信夫摺』、末尾の発句を付す形式は『朱雀遠目鏡』などと等しい。本文は、各遊女の面躰・風俗・心ばへ・酒事・全盛・その他について、かなり事実在即したと思える記述批判であつて、諸分秘伝書の要素はなく、他書に類少い茶屋主人・駕かきの妻の評判や、「御全盛」や「末頼母し」など遊女の盛色を示す評語は、案内記的要素を加味するであろう。評者は、全般に穏やかな態度で終始し、殊更な趣向を試みるでなく、批判は囲女郎にまで及ぶが、一篇の均斉をよく整わしめている。

題名は、先行評判記に『吉原ますかゝみ』『吉原つれく草』『吉原伊勢物語』『古今若女郎衆序』『吉原源氏五十四君』など、古典をもじる題名が多いのに倣つて、源氏名を列ねる評判記ゆえ、俗なる湖月抄であると、当時遊女間にさえ流行した、延宝二年七月京都刊行、北村季吟の源氏註訳書『源氏物語湖月抄』に名を借りたこと明らかであろう。本文また源語に因む箇所多く、一例せば、冒頭「此家のかたわりに……簾なともいとしろふ涼しけなるに」は、夕顔巻の數行をそのまま嵌入した如きである。

成立年代は、『湖月抄』の刊年延宝二年以降であるが、さらに局限すべく、本書所掲人名を同年以降出刊の遊女評判記・西鶴の諸作品・『けいせい色三味線』（元禄十四年八月刊、同十五年二月再刊）巻頭「嶋原女郎惣名よせ」・『傾城洗髪』（元禄十六年六月上旬刊）四之巻「嶋原女郎懐日記」^{註4}に求めた結果は次の如くであった。（但し、抱主が異なる場合はとらない。位は、註記なき場合はすべて本書におけると同じい。）

天和元年 『朱雀遠目鏡』 花崎・井筒・せんじゆ 三名

” ” 『おもはく哥合』 ナシ

” ” 『朱雀諸分鑑』 花さき（かはるは上村五郎右衛門内と思えるゆえとらない。） 一名

” ” 『朱雀遠目鏡跡追』 千珠（『朱雀遠目鏡』のせんじゆと同一人） 一名

貞享四年 『朱雀信夫摺』 花崎・野風・八雲 三名

元禄元年 『諸国色里案内』 花さき・野風・八雲（端の部にも求めれば・田村・いつき・八ゑかき） 藤屋彦右衛門 四名

元禄十五年 『色三味線』 西鶴の諸作品 花崎・野風・三五・薫 四名

花さき・野かせ・さんご・井筒・よしう・とこよ・きく川・ことら・やくも・きてう・たむら（鹿）・とざわ・やへがき・いくの（梅）・ふぢや庄右衛門^{註5}・はつ（本文中） 一六名

花崎・野風・三五・与州・香織（松）・大磯（松）・床夜・菊川・琴浦・八雲・大淀・三浦・奇帳・田村（鹿）・伊津記・戸沢・幾野・数馬・藤屋彦右衛門 一九名

元禄十六年 『洗髪』

ここに見る如く、『色三味線』『洗髪』二書を除けば、共通する名は甚だ僅少であつて、かつ、それも花崎・野風のように特定の家に数代にわたつて存在する源氏名であり、本書の同名者と同一人物だと断定し得るには至らない。これに比し、『色三味線』は十六、『洗髪』は十九の名が一致し、この数は本書所掲三十二人の五乃至六割に相当するのみでなく、共通する名は下級遊女にも及び、従つて、本書の成立時期を両書刊年に近い頃と推定できよう。

次いで、この両書の刊年月を手がかりとし、さらに本書成立時の局限を試みる。（以下、本書に俗、『色三味線』に色、『洗髪』に洗の略号を用いることがある。）即ち、

〔A期〕『色三味線』出刊の元禄十五年二月以前^{註6}。

〔B期〕元禄十五年二月から『洗髪』出刊の元禄十六年六月上旬まで。

〔C期〕元禄十六年六月上旬以降。

〔本書成立がA期だと俗↓色↓洗、B期だと色↓俗↓洗、C期だと色↓洗↓俗の順の三書成立となる。〕

の三期を設定し、次に本書所掲人名を分類して左の数グループに分ける。

〔I群〕俗、色、洗三書に出る名

〔II群〕位に変化ない者

〔III群〕位に変化する者

〔IV群〕位に变化ある者

〔V群〕位に变化ある者

〔VI群〕位に变化ある者

〔VII群〕位に变化ある者

〔VIII群〕位に变化ある者

〔IX群〕位に变化ある者

〔X群〕位に变化ある者

〔XI群〕位に变化ある者

〔XII群〕位に变化ある者

〔XIII群〕位に变化ある者

〔XIV群〕位に变化ある者

〔XV群〕位に变化ある者

〔XVI群〕位に变化ある者

〔XVII群〕位に变化ある者

〔Ⅱ群〕俗・色二書に出る名

井筒・八重垣・はつ

三名

〔Ⅲ群〕俗・洗二書に出る名

(イ) 位に変化しない者

大淀・三浦・斉宮・教馬

四名

(ロ) 位に変化ある者

かほる・大磯

二名

〔Ⅳ群〕俗一書に出る名

玉きし・山の井・小井つゝ・ともへ・小紫・いつゝ・夕霧・八橋・妻川・千寿

一〇名

ここで各群につき三期それぞれにおける成立の妥当性を考察検討した結果を総合し、本書成立がそのいずれの期に位置するかを推測しようとするのであるが、それには次の方法をとる。Ⅰ群(イ)十名という多数の遊女が、本書成立をいずれの期に置くにせよ三書同家同位同名であり、しかも本書中目下「全盛」と謳われる全九名中の七名を占めることから、襲名による同名別人を含むとしても、なお同名同人の場合が多いことを予想し、本書成立が「色三味線」「洗髪」刊年に極めて近いと判断する。さらに敷衍して、Ⅰ群(ロ)・Ⅱ群・Ⅲ群(イ)(ロ)の三または二書同名も同一人との仮定に立ち、各期成立説構成の際、同一人の在り方として矛盾または不審の事実が介在し、成立説構成の可能性を減退せしめると思える場合、これを成立説構成に対する否定的条件として摘出し、第二段階を終る。次いで、この各期についての否定的条件各項を詳細に検討し、三または二書同名別人の証とするに足る積極的理由を、本書中の評語や、「色

三味線」と「洗髪」における順位対照に基づく昇位・降等の事実などから得て、同人とした場合三または二書間に存した矛盾を解消し、可能な限り右各項を許容したいと試みて、これを第二段階とする。改めて第三段階では、各期成立説構成の可能性を促進せしめる事実を、やはり評語、昇位・降等の事実などから指摘して、これを肯定的条件とし、ここにおいて、否定的条件の消去度合が最大であり、且つ肯定的条件最多の期を、本書成立時と推定しようとするのである。第一段階として掲げる、各期成立説構成に関する否定的条件は次の通りである。

○A期成立説構成の場合

(一) Ⅰ群(ロ) 田村の、俗梅↓色鹿↓洗鹿という降等。

(二) Ⅰ群(ロ) 幾野の、俗鹿↓色梅↓洗鹿というやや異例な二度の位変化。

(三) Ⅱ群(イ) 四名の、俗昇↓色不見↓洗見という不自然な中間不在。

(四) Ⅲ群(ロ) 二名の、(三)に同じ進退。

○B期成立説構成の場合

(五) Ⅰ群(ロ) 田村の、色鹿↓俗梅↓洗鹿というやや異例な二度の位変化。

(六) Ⅳ群十名の色不見↓俗見↓洗不見という多数の慌しい短期間

出沒。

○C期成立説構成の場合

(七) Ⅰ群三名の、(三)同様な色見↓洗不見↓俗見という不自然な中間不在。

(ハ) Ⅲ群(ロ)二名の洗松↓俗梅という降等。

以上八項の否定的条件の消去を試みて、各項について検討する第二段階にはいる。

(イ) 俗で「いと深からずとも今一とせ二とせにはよき御身に成給ふ事重畳々々」と評された梅の田村が、色・洗で鹿と降等されるのは不審で、別人と思える。この場合、俗に見える田村は、Ⅳ群の十名同様、元禄十五年二月以前の身請け退廓とすべきか。

(ロ) 俗で「御位にはおしき君ならんかと」と評された鹿の幾野が、色で梅と昇等するはよいとして、再び洗で鹿と降等される理由は何か。ここで別人の証はない。

(ハ) 数馬を除き、全く別人の証なし。数馬は俗で「久しくくるわにはすみ給ふまし珍重」と評され、俗・洗二書で別人たりうる。

(ニ) 俗で梅であったかほるは、同家内引き続き松6人中5位に在る野風を、洗において凌駕して松2位に至るわけで、いかに俗で「ひとしほ全盛有へし」と称されたとは言え、かかる躍進がそう多くあるとは思えない。また同じく、俗で「難波津の花なりしとかや」とのみあって「全盛」の評語ない梅の大磯も、俗で「全盛いふところな」き梨浦を凌いで、洗では一躍松となり、梨浦は梅1位にとどまるであろうか。兩名とも、二書別人と考えられよう。

(ホ) 俗で「いと深からずとも今一とせ二とせには」と突き出し直後らしく評される田村が、既に色で鹿として出ること、また「今一とせ二とせにはよき御身に成給ふ事重畳々々」と期待され

つつ、洗で鹿に落ちることはそれぞれ別人と思える事由で、この場合は二人説あるいは三人説を立て得る。

(六) 出世早々の身請けによる退廓と解しても、元禄十五年二月月から同十六年六月にかけての十七ヶ月間、総数の三割強という事態については解釈つかない。^{註11}

(七) 色で梅16人中1位であった井筒は、一年半以上後の俗で「御すへさかへ給わん」と評される同名とは、事実と評語が撞着するゆえ別人、また色で鹿16人中15位にあつた八重垣は、俗で「御としわかなれば末頼母し 八重垣に露やそめけん鷲もみち」と詠まれる新造らしい同名と別人の趣がある。

駕かきの妻はつについても事情は等しい。色本文に実在者名らしく出、それほど名が通つていたらしい遣手はつは、洗刊行時すでに在廓せぬとは言え、俗で「けに信あれは末やさかへん」と記され、「心根おとなしやか」と評される駕かきの妻とは別人にしか思えない。

(八) かほる・大磯は、俗をB期に置けば俗梅↓洗松の昇等コースで一見極めて妥当らしく見えながら、なお鶴におけると同じ矛盾が介在し、二書別人と見做すべきであつて、B期成立説構成の肯定的条件たり得ず、俗をC期に置く場合もまた否定的条件たり得ない。なぜなら、かほるについては俗が降等を認めながら、一方なお「ひとしほ全盛有へし」と評するのは矛盾であり、洗香織↓俗かほるの表記の違いもさることながら、二書別人と考えるべきで、洗の刊年前後に短期間在廓し、何かの事情で退いた松の香織に代り、急ぎ大坂に求めて同名を襲わせたと、俗

の「難波の花をみやこの継穂にせし君」を解されないか。同じ大坂出身の遊女という連想からか、本書中の配列でかほるに続く大磯についても、前時当郭内の太夫であったにしては、単に「難波津の花なりしとかや」なる過去依聞の表現は不足であり、二書別人の感を抱かせる。たとえ同人の降等としても、そもそも色で太夫はおらぬ中堂寺大坂屋に、洗で一人のみ現われる事情も何かあつて、ここに関連すると解釈すれば、否定的条件消去はできぬでもない。

以上、第一段階で抽出した否定的条件につき考察を加えたが、明白に消去不可能であつたのは次の各項である。

- A 期成立説構成の場合 (二) (三) 二項
 B " " " " 一項
 C " " " " ナシ

従つて、否定的条件消去度合が最大のC期成立説が、第二段階では問題なく有力である。次に第三段階にはいり、各期成立説構成についての肯定的条件を見出す。

○A期成立説構成の場合

- (一) I群三名中、井筒と八重垣の二名は、井筒が「御すへさかへ給わん」、八重垣が「御としわかなれば末頼母し」と俗で評されて、俗見、色見、洗不見と進退するゆゑ事実と評語が一致する。

(二) IV群千寿は、俗に「ちかきころは全盛名にたつ末(略)此まゝに里を御出候様三」と見え、俗見、色不見、洗不見のA期説が最も妥当である。^{註13}

○B・C期成立説構成の場合

- (三) 俗と洗との共通名が、俗と色との十六名に比し、さらに三名多い。

(四) I群(イ)琴浦が色梅5人中4位、洗梅4人中1位と昇進のところに俗で「全盛いふところなし」と称されれば、事実と評語が符号する。

(四) I群(イ)八雲が色梅8人中1位、洗梅11人中7位、戸沢が色鹿16人中6位、洗鹿19人中11位と落ちたため、俗で「全盛」「末頼母し」などの評語を伴わぬとすれば、これも事実に一致する。

(四) I群(ロ)幾野も色梅12人中7位、洗鹿13人中4位と降等しつつ、俗で「御位にはおしき君ならんかと」と評されたとすれば、評語が落ち着く。

○C期成立説構成の場合

(四) I群(イ)とこよは、俗を色梅12人中11位、洗梅11人中8位の中間に置くよりも、色、洗、俗と後に置いて「ちかきころはせんせいやまし(略)末頼母しや」と評される方が「いやまし」の語に相応しい。

(四) I群(イ)菊川の「御全盛」と、同じくきてうの「全盛有へし」という俗の評には、現状への賞揚と未来への期待という違いがあるが、色梅16人中15位の菊川・14位のきてう、洗梅16人中10位の菊川・9位のきてうと並行昇位する一年半には、両者の距りに大差はないわけで、この場合も、色、洗、俗の順列が適當する。

(他) I群(ロ) 田村は、色鹿↓洗鹿の一人と、俗梅の一人を別人

と考えれば、俗の「いと深からずとも今」とせ二とせにはよき

御身に成給ふ事重々々々」が効いて来る。^{註16}

(1) III群(イ) 数馬は、俗に「久しくくるわにはすみ給ふまし」と見え、洗、俗のC期説が妥当する。

(2) IV群の十名中、「いよ／＼つれてせんせい」「末なかく全盛たるへし」など期待の評語を伴う者は、「ちかきころ松のくら

いにつき給ふ」た玉きし以下八名に及ぶが、これらの讃辞を受ける遊女には新造が多かるうし、色不見↓洗不見↓俗見のC期説が最も自然な在り方となる。

このように、肯定的条件もC期成立説構成の場合に有利であり、最多となる。

最多となる。

A期成立説構成の場合 (一)

B " " (二)

C " " (三)

否定的条件の最少を主条件、肯定的条件の最多を副条件として、これに適する時期を三期中から選択するというこれまでの操作はき

わめて機械的であったが、A期説におけるIII群(イ)三名が、俗・洗

二書で別人たる積極的理由の提示、B期説におけるIV群十名の短期間在廓の合理的説明がなされ得ぬ現在、A期説B期説よりも、より

C期成立説に妥当性が存すると思われ、不充分的証明ながら、本書の成立年代を元禄十六年六月上旬以降宝永初年へかかる頃と推定する。

本書の編者は現在知るべくもなく、果して本書が上梓に至ったかも疑問である。脱字・重字などの誤写が多いこの草案は転写本であり、書写者もまた明らかでない。しかし、「近世遊女評判記年表」^{註16}

において、元禄宝永期、次第に影をひそめ行く島原の評判記が、いかなる伝写を経てか西肥の地に見出されたことは興味深い。資料の不足もあって解説に意を尽くし得ないが、ひとまずの御報告とする。

註1、中ノ町一文字屋の同一屋号で、七郎兵衛と次郎右衛門の二

家があるが、本書では主人名を付した区別なきためわからな

い。「けいせい色三味線」あるいは「傾城洗髪」に井筒・菊

川・きてう・戸沢・八重垣・数馬の六人は七郎兵衛内、与州

・田村の二人は次郎右衛門内と見えるゆえ一応それに従い、

他の六人はより大店であった七郎兵衛内と見做しておく。編

者が強いて区別しなかったことを思えば、与州・田村といえ

ども次郎右衛門内の同名とは別人であるかも知れず、またそ

う思えるふしあることも後述する。

右二家の遊女数十四人は、『洗髪』所掲全島原一五九人中五一人に徴しても、本書所掲三十人中に占める比は大きい。

同家抱えの小井つ・八橋・千寿については「色三味線」「洗髪」に、山の井については「色三味線」のみに同位同名が他家に見え、本書抱主名の誤記或は誤写を認め得れば同二家

遊女数の過多は解決するが、傍証なき今は従えない。

註2、本書には下ノ町大坂屋とあるが、類書には揚屋町角とある家である。「色道大鏡」十二、西新屋敷六町内家摩之図の華屋町西側大坂屋太郎兵衛に「但比屋敷計下之町内也」とあり、柳町下之町にも同家が見え、家屋を何ヶ所にも所有したことが知られる。

註3、「諸艶大鑑」七ノ二「勤の身狼の切売よりは」にも「去太夫殿へ。源氏物語を借に遣しけるに。其まゝ湖月おくられて」と見える。

註4、「朱雀遠目鏡」「朱雀諸分鑑」「朱雀信夫摺」は稀書複製会本、「おもはく哥合」「朱雀遠目鏡跡追」は中村幸彦先生写本、「諸国色里案内」は未刊文芸資料翻刻本、「けいせい色三味線」は日本名著全集所収本、「傾城洗髪」は古典文庫本をそれぞれ使用し、西鶴の諸作品については、富士昭雄氏「西鶴作品の素材」(東京大学教養学部「人文科学科紀要」第一三輯所収)を利用した。

註5、「庄右衛門」は前行の「一文字や庄左衛門」にひかれた板下の誤記と思え、正しくは「ぶちや彦右衛門」であろう。

註6、京の巻「第五 花にも負ぬ三五の月」に「いひさうな事此方から以て参れば、宿屋夫婦遣手のはつも、はや敵に先をこされ、心に籠し願事の裏をかかれて、」と見える。

註7「色三味線」「洗髪」二書の場合は総名寄細見と認められるゆえ全遊女名を掲出すると思われるが、「遠目鏡」「信夫摺」「色里案内」三書も、それぞれ一三四名(松梅鹿)・八四名(松梅)・一四九名(松梅鹿)を掲げ、「色三味線」の一二四名

(松梅は七〇名)、「洗髪」の一五九名(松梅は八四名)にほぼ近い数であるから、調査のための数の条件は、この三書に関する限り「色三味線」「洗髪」ときほど変らない。

註8、ここでは、日本名著全集所収本の刊記に従った。なお長谷川強氏編「八文字屋本年表」(『近世国文学—研究と資料』)所収によれば、初摺本の刊年月は元禄十四年八月であり、巻頭「惣名よせ」が初摺本再摺本同一たり得る可能性を考慮すれば、A期下限(B期上限)を元禄十四年八月まで引き上げることが許されるが、実証できぬ今は元禄十五年二月をひとまずの規準とする。

註9、名寄細見に見える順位を、そのまま番付と受け取るとは危険であろうが、一応、一家内における位置を知る目安にはなるかと思ひ、かかる方法をとった。

註10、「色三味線」「洗髪」二書の対照で、同家同名の遊女七六名(「洗髪」所出総員の約半数)中、位が変る例は、この幾野と、拳屋町角大坂屋の大江の色梅、洗鹿の二例だけである。

註11、本書の遊女抱主名に誤記あるとすれば(註1参照、また、ともへは「色三味線」に異家同位同名することも注意)、このグループの数は減ることになるが、誤記説は採らない。

註12、「洗髪」に見える遣手は、端女郎の分、揚屋之分を加えて三十名近く、「朱雀遠目鏡」の「やりて三十三人」の記事に徴しても全員を網羅すると思われ、はつが当時在郎したなら当然出名しなければならぬ。

註13、千寿なる遊女がかって盛名を謳われたこと、「風流曲三味

線」(宝永三年七月刊)一之卷「第二 仕掛のよいからくり
簀」にも、高橋の太夫姿形容の部分に「歩行ぶりしとやか
に、道中のつしりとして霧波千寿にいきうつし、」と見え
る。本書中の同名と同人たる証はないが掲げておく。

註14、I群十三名中、これら評語を持たぬ者は、八雲・戸沢・幾
野の三名のみである。

全三十二名中茶屋主人・遺手を含む二十三名はかかる評語
を伴い、この評判記が盛昌する遊女を殊更選んだらしいこと
がわかる。半数を占める一文字屋抱えの遊女中に、太夫が一
人も見えぬ不審も、このような理由から解明できようか。

註15、I群(I)の与州は、色梅3人中1位、洗梅4人中3位
で、俗の「しかも全盛」の語がやや一致を欠く。田村・与州
共に色・洗の同名とは別人とすれば、本書の両者の抱主は、
一文字屋七郎兵衛かもしれぬ。註1参照。

註16、野間光辰教授編。(『西鶴新攷』所収)

小稿を成すに際し、中村幸彦先生の御指導を得た。また、『け
いせい色三味線』『傾城洗髪』の利用について、長谷川強氏から
懇切な御示教を受けた。附記して、心から謝意を表します。

郭西 俗湖月抄 草案

藤屋彦右衛門 道筋ノ角茶屋

此家のかたわりに檜垣といふもの新して
 上ははしとみ四五間はかり明々わたして鏝
 などもいとしろふ涼しげなるにことなふ
 こゑひく成投ふし三筋の糸は風にほのめ
 き心をうかす是なん誰か住たる軒
 かと見れば藤屋のかたとや云し実在世を
 渡るならひとてあらゆる遊君のなふられ
 ものに身をなし不断美食にふくれ腹中
 に酒波をたゞゆ取遣のひかへ帳なしに金銀をも
 ふくる事を所作とすしかし唯人のならぬ
 しゃうばい物真似諸芸きやうにして
 多の人を笑すされはあつま難波津都
 三ヶ國のまれものこともおろかやみやこ
 目口かわきの中にてゑんのうと云へる仇
 名つけられ給ふは御手柄酒ことのうちに惣
 身のうとき所有左の手を上にして物云
 給ふそかし鼻と口との間にてわらひ跡は

表ナ

のにて引こゑやゝしはし此人の一芸なり
 されは過しころ道筋にて下駄ふみちら
 しねほれ顔嶋原にそのかくれなし
 其外男女の真似ひたいにて人を見ながら
 手をつかね其様なことはおかちやま々ちや
 ちやますなと申さるゝ其身実にして
 その時の興きやうに身をまかすかしこきとや
 云ん朝日さす軒端もいよゝ末なかく
 さかへ給わん

居なからに初日を拜む軒端哉

花崎 下ノ町桔梗屋内 位松

此君のほと心ばへなどはも云たるけ
 はいにこそものこしにもしるれそもや
 花崎の君は何の縁にかかゝる身をしつめ給ふ
 そや紅顔美を尽し笑給ふ御声には目に
 見へぬ鬼神も心を和々踊給ふ風俗三筋
 町にまた有まいよそおいならぬかこの手
 かしわと云置しも思ひ合すれはとこやら
 に男色にことならずと云し人もありうそ
 なしに十八公の御全盛うち忍ひようし
 たまへる御けはいみしうなまめきて

ニウ

一ウ

見しらん人にこそみせめ

花も実もある葎崎の時代哉

玉きし

下ノ町桔梗屋内
位松

野風

下ノ町大坂屋内
位松

牡丹は花の富貴成もの菊は花のあん成
か松はとかへりはな遊君はうつくしき物
女は髪のみでたからんこそ目立へかんめ
れ此君美きと云はひたいきわに花の露
をおけるにひしせい高からすひくからす
おしたれたる有様松の御位にそなわり
給ふも尤そかし御全盛

君を猶こよひは借し半夏生

三カレ

井筒

中ノ町一文字屋
位梅

三五

上ノ町きくやう屋内
位マヤ

古人は雨月を楽照月もおかし当世はくら
き寝屋の月をたのしむされは此君い
みしき御けしき三五の月とや云んこと
に夕まくれはかさにまゆき花すかた実
初緑の御位御全盛

名月に鳥家は闇成八こゑ哉

四〇一

にけなきほとたと申侍るも去ことそや
世の中に辻うらを聞と云へるも俗らし
き事なれとも能辻うらをきけは心よし
されば此君ちかきころ松のくらいにつき
給ふしらぬものまてほむる全盛日にまし
給わん一鉢美にして然もかしこし十
八公は末なかく御たもちと思わるゝ
若松は風吹かたになひく也

面躰うつくしくおもさし丸しせい高から
すひくからすして情の山を重給ふ陸奥の
忍のみたれと詠しもさることそや御位高きも
梅になし諸人に恋の施行尤そかし思へ
とも猶あかさりし夕かほのと侍りしにも
同したらんや御すへさかへ給わん
露いとふ日かきの下の百合の花

四三

与州

中ノ町一もんしや内
位梅

花の下にかへらぬことを忘れ美君にむかへは
世事忘有つる花の露に濡たる心地してそい
ふし給へるさまうつくしう愛こほるゝやう
にてしかも全盛嶋原を照す格子住居し給ふ
事さらになし唯人のうわさよく速からぬに
のかれ給わんにそれこれとせりおふことも
恋の種ならんか御仕合

咲花に朝風いとふ詠かな

かほる

下ノ町大坂屋内
位梅

めんてい然も美也おたしくかるゝしからぬ
御こゝろの程も尤よきなりさゝにおもしろ
き所有りて御心たてなりこともおろかや
難波の花をみやこの繻穂にせし君はつ
かしくおもわるゝことにわかちてて心もと
なからすつかうまつらせ給ふひとしほ全
盛有へし

蚊遣火のかほりゆかしき端居哉

大磯

中堂寺ノ大坂屋内
位梅

壬生川の流るゝ末は妹背かわ難波津の花
なりしとかや一鉢おとなしく然も美なり
あさからぬ心さしいまさりぬへくなんとそ
しらぬ事なからわけのすい一とおもわるゝ曾
我物かたりを思いやれば御名にゆかし

初霜やさなから清し虎か石

とこよ

下ノ町桔梗屋内
位梅

めんていにくからすいとよし有ルさまして
色めかし此君のさけには夜の明るをしらす
時ゝの挨拶よしちかきころはせんせい
いやまししこなしは東のいきかたにたる所
有りされはにやうかむ瀬とかや云し盃
三ツあかり給事かくれなし身をすてゝ
こそうかむせ末頼母しや

朝酒や床の柱にきりゝす

菊川

中ノ町一もんしや内
位梅

セウ

菊川の流はたへすしてほのめいたる御姿
一躰風俗尤よし紅顔におもしろき所
有り御心ばへにそなわりてくらひあり
此かわのなかれのすへにて水むすひたら
んものにはあやかりたし御全盛

百菊や末の松山道も波

山の井

中ノ町一もんしや内
マツ梅

岩かくれの昔のうへになみ居て土器ま
いるおちくる水のさまなどゆへ有。滝の
けににくからす山の井の君めんていよし
心はへおとなしく利発なり風俗今
少し心つけ給へかし年遠程せんせい
有つへき君そかし

涼しさわ山の井に見る姿かな

八ウ

琴浦

中堂寺大坂屋内
位梅

花は風をいとふ柳はかせにそむくも
おかし女郎はきの字の形と云しは尤なり
髪はつや／＼とかゝりて末のふさやかにさ

くりつけられたる程いとうつくしう
おもひやらる此君一躰美にして然も
全盛いふところなし

風になひく色しなあるや花すゞき

小井つゝ
中ノ町一もんしや内
位梅

高安の里に住給ひし井筒にやまさる
君なればとて今の世に小井つゝと申
せしは此君の御事をやしらぬものまで
も御よそおひ聞も心をうかすきすか女郎
一躰風俗三筋町の手本ともならん此里
すきこのめる人のうわさをや君人の
御ほとをばされくつかへるいまやうのよし
ばみよりはこよなうおくゆかし

水かゝみ花よひんづら雲のみね

九ウ

八雲

上ノ町きゝやうや内
位梅

花を見ても月を見てもおこりやすきは
此まとひなりしりめにみをこせ給へるま
みいとはつかしけにけたかううつくしけ

なる御かたち御顔かわうすに見へさせ給へ
とちやわんの酒見事〜

寝もせぬ雲の初音や朝の酒

大淀

下ノ町大坂屋内
位梅

めんでい風俗にくからす此君梅の位
そなわり給ふはとこそに能所有かしかのみならず
しこなしおもしろくいきかたにおもひきり
たるどころあれは人によりふかくも怒も
の有へし酒過ぬれはやつこな所あり
女郎の中にもかくこそしこなし給ふは
御手からいよ〜全盛

淀舟に幸聞やほとゞぎす

三浦

中堂寺大坂屋内
位梅

実心なき草木なから出口の草は四季
折〜遊君のすそになてられちとあや
かりたしされは此君いみしくきよ
らにて桂のまゆすみ御めにくらひ有りて
唯人とは見へす御名のとくあらわれて三浦

の君とや云せんと昔忍ばし

雲を出る三浦か崎や月のかほ

きてう

中ノ町一もんしゃ内
位梅

木〜よりは松の雪(二字不)暖に見ゆると云
伝へ侍るも尤そかしゑならぬうつり香
几帳の影のほの見ゆるは何とやら心地
よけにおもわるゝ此君一昧美にして
御声におもしろき所有り風俗遊君の
情を重給ふ全盛有へし

とこやらにすねて色有り梅の枝

ともへ

下ノ町桔梗屋内
位梅

日たけておの〜いと静に門の柳の影に
居て客待なりもしとけなくおかし
此君一昧美なり遊君は人目には優うに斗
見へて禿出す世話に心をいたますされは
にやちかきころ若松の風をつくり
松に直し給ふは御手からいよ〜つれて
せんせい

手に請て村雨をまつはなぬかな

小紫 中ノ町一文字や内
位梅

二二ウ

たゝたのめしめじ(かき)原の世のうわさ誰
もうつくしきと申せし松の位には
成り給ふ君と云はおろかなり勝て利発
にして心うつくしう御有様のかたほ
にそのものありぬとおほゆるさすも
なし人よりさきに見そめてしかば

松の花世にいふ藤のさかりかな

いつゝ 下ノ町柏屋内
位梅

花もみちよに出んほとは猶ゆかし一軒
美にして人よりはことなるさげに
興あつて夜の更をしらす暫の寝の
うちに百年のつみを忘る世こそつて
此君になつむもの多し末なかく全
盛たるへし

残る月井筒に清し桐の花

夕霧 中堂寺大坂や内
位梅

二三ウ

うつくしきといふはおろか御よをおひ御
姫様達とも云つへし御ものこしには
たさるゝものわけて多し御手跡こと
にうるわしく御文からたて成り風ひ
やゝかにうち吹てやゝ更行ほとに少し
まとろむにやと見るけしき空焼の
けふりにむねをいたますいふにいわれ
ぬ所知る人そしると云し人もあり今
すこし御心はへつよく御もち候はゝ極上く
夕きりや風にとけぬる洗髪

田村 中ノ町一もんしや内
位梅

色里のことはにア、しけといへるはとふした
文字の通用そい此君ハ御かほにつるに
しんきな色なし風俗と云すかたと云位
ひくきはおしき事さけ呑ものは多けれ
とほと拍子よくいきかたのみ給ふそ
かしきす(かき)こたなれ給ふゆへか門たちの
御姿とふもいわれぬ風有いと深からす

二四ウ

とも今一とせ二とせにはよき御身に成給ふ
事重豊々々

名もしけしたむらの君の花かつみ

齋宮

下ノ町桔梗屋内
位鹿

此御かた位は春日野なれと御心は十八公の
花とも云けらしめんてい丸おもてふとり
しゝなりわけのみななみたつねては此君なら
らてはと申せし御手跡になすむもの多
ふんからよくは書給ふ人の目をもおとろ
かし心をもよろこはせ給ふへし
しつかなる床にしらけし螢哉

八橋

中ノ町一もんしや内
位鹿

實花けにやのほとりは立うきとかやめんにいく
からす心ばへ気性なり此ころは御顔におと
なしきもの見ゆるさる人よいのといわれれ
し美たるも是にはまさらん末頼母し

杜若つほみやひらく朝嵐

戸沢

中ノ町一文字屋内
位鹿

霞空のけしきをも見んとよしあるさまめん
おもしろし酒事よし人の口には戸がたて
られんもの御内證によき所有と云し
御髪にあらわれかんはしや

花の雲さなから沢の流かな

八重垣

中ノ町一もんしや内
位鹿

秋の夕日はまして心のいとまなくおほし
みたるゝ御あり様めんていくからす物
事に愛有りカて一座よし御としわかなれば
末頼母し

八重垣に露やそめけん薦もみち

幾野

下ノ町桔梗屋内
位鹿

嵯峨野にてわれおちにきと人にかたるなど
僧正遍照か詠しもさる事そや此君には
たさるゝもの多有へしあかぬわさかな

一五ウ

一六ウ

との給ふも御位にはおしき君ならんかと
みな人も幾野に手折女郎花

数馬
中ノ町一もんしや内
位鹿

心をかけてあなかななるゆかりもたすね
まほしきこゝろもまさり給なるへしと
有めんていにくからす風俗よしちかきころは
さゝのゑい見ゆるか久しくくるわにはすみ
給ふまし珍重

はつかしの螢に見せん酒の酔

妻川
中ノ町一もんしや内
位鹿

めんてい丸し御髪にしなあり紫の根
にかよひたる野への若草とかやいまた物
こと此比の事なればわかちいかゝ
藤のはなもけふこの比の盛哉

千寿
中ノ町一もんしや内
位鹿

一七ウ

世はおろかなるわきとて鹿嶋の神に帯
かへるも恋ゆへか帯のそらとけも客まら
顔人のくせさまゝ有ものなれと此君帯
を時ならすもいしり給ふは女郎なれば
おもしろし御姿もよしちかきころ
は全盛名にたつ末の是観音の御利生たゝ
此まゝに里を御出候様ねひくわんおん
願はしやかれたる枝に雪の花

はつ
ゑびす川卸半か妻
仇名女武者

色の里より恋のおも荷をかたにかけかへる
かほして皆人にかこかゝせしはよき所作
なり礼儀しりかほに肩に羽織かくるも
おかし惣髻髪（おんげい）の結ひふりよき所もあり又
いやしきわけふりもあり人にすくれて仏
神信心よくするものなり稲荷にてもとめ
たりし土の鈴いくつとなくかけならへす
へて夜おき棚さかしなどには火そくもち
によし茶かま焼付（やま）も酔さめゆへかま
だるし此時はよき遺看（いけん）なり上は長者町
中ゑびす川下姉小路かわのたな其外所々
に数多ししかし氣（き）により実ふしつ

一八ウ

はある物(か)人にしたかへはすこしはやり可
なるたわむれ事など云かわして是も

珍しき心地をすれされは爰にその身女に

して男のやくをつとむ都なればとてかゝる女も

有けんところらに風俗おもしろき品あり

五月雨の淋しきにかこふとんかゝへ行

すかたもゆかし心根おとなしやかに夫の

うへをし(て)のく尤貞たるへしけに信あれは

末やさかへん

笋の男竹女竹のうき世かな

一九ウ

三〇オ

原口裕編

日本書紀漢字索引(一)

神代卷所収

油印三七〇頁

頒価四五〇(送料別)

第二分冊(卷三より卷十まで所収)は本年九月
続刊の予定で、目下印刷の準備に入っています。
御希望のお方は、当研究室内、原口裕あて御一
報下さい。